

あおもり産木材地産地消ガイドブック Ⅻ

地元の山の木で建てた

# 青森県産材の家

ふるさとの木を生かし 山を守る

巻頭特集

山火事防止

— 森林を火から守ろう

ふるさとの山は

県民の共有財産

青森県木材利用推進協議会

ふるさとの木を生かし 山を守る

——それは、この本のテーマでもあります。

地元の山で育った木で家を建てるといことは、

ふるさとの自然を守ることもつながります。

木を育て、その木を伐り出して家を建て、

そしてまた、木を植える。

——この繰り返しこそが、未来を生きる人々の暮らしを支え、

地球環境を守っていくことへとつながっていくのです。

自然に優しい環境づくりは、

住む人が心地よく暮らせる環境づくりでもあります。

県産材を生かした家づくりに奮闘する人々とともに、

木を育て、山を守り続けている人々の存在も

忘れてはなりません。



あおもり産木材地産地消ガイドブック

地元の山の木で建てた

# 青森県産材の家

ふるさとの木を生かし 山を守る



## CONTENTS

### [巻頭特集]ふるさとの山は県民の共有財産

..... 001

### 2022年度第15回

### あおもり産木材活用建築コンテスト作品集

建築コンテスト表彰式 ..... 007

#### 〈新築住宅部門〉

最優秀賞 ..... 008

優秀賞 ..... 009

新築賞／審査員特別賞 ..... 011

#### 〈非住宅部門〉

優秀賞 ..... 012

新築住宅部門応募作品 ..... 014

### 地産地消に取り組む大工・工務店

有限会社岩木建設 ..... 016

株式会社大山建工 ..... 024

有限会社キーポイントホーム ..... 028

企業組合県木住 ..... 044

チーム県産材 ..... 058

有限会社大坊建設 ..... 062

### すすめよう木材の地域循環

株式会社今井産業 ..... 066

青森県木材協同組合組合員名簿 ..... 070

[広告]青森県製材JAS認定工場 ..... 071



## 巻頭特集

# 山火事防止

— 森林を火から守ろう

# ふるさとの山は県民の**共有財産**

テレビ画面から、ものものしいヘリコプターのプロペラ音が流れ出た。山の上空からヘリコプターが撒いた水が、立ちのぼる煙に斜めに降りかかる。——十和田市法量夏間沢で発生した山火事を報じるニュース番組だった。ヘリから散水される水量が心細いほどに少なく見えるのは、それだけ煙の湧き上がる面積が広いからだろう。この3日前の5月6日にもむつ市川内町の福浦山で山火事があったばかりだ。長い年月をかけて育てた森林資源が瞬時に燃えてしまう山火事の怖さ。実際に焼け跡に立ち、被害を目の当たりにして、「無念」を噛みしめようと、現地へ向かった。

## 十和田湖から水を

「ふるさとの木を生かし 山を守る」——それが『青森県産材の家』の発行趣旨。ふるさとの木を生かして建てた「家」を中心にこれまで紹介してきたが、「山を守る」活動については「植樹」くらいで、最も恐れなければならぬ「山火事」には触れていなかった。ニュースを見てそう気が付いた。

人が山に入り、出てきた後に、誰もいない所で、火が点く。煙に気が付いたときには

すでに炎が舐めるように燃え広がっているのだ。猛暑で発生したヨーロッパの山火事なら自然災害の名のもとに異常気象を嘆くばかりだが、日本では人為的な原因が多いとされる山火事を、人為的ならばこそ注意を喚起し、森林の大切さを訴えることで、人の手から不用意に離れて燃え移る「火種」の二つでも抑止できないものか。

その一助になればと、「巻頭特集」に山火事防止を取り上げた意向を伝えるに、県農林水産部林政課を訪ねた。



燃え残ったスギの立木が黒っぽい柳の苗のように見える焼け跡

今年(2022年)に入ってから青森県内で発生した山火事は——むつ市川内町の福浦山(5月6日)と、十和田市法量の夏間沢(5月9日)——の2件。

てつきりその2件だとばかり思っていたら、そんなものじゃなかった。担当者が提供してくれた「令和4年林野火災発生状況一覧表」にざらりと並ぶ項目がみなこの半年で発生した山火事なのだ(6月現在)。24件もあった(6月現在)。こんなにも多く発生しているのか……。(2022年12月現在で25件)

焼けた面積が最も広いのは十和田市の夏間沢(27・46 ha)で、東京ドームの約6倍に相当する。次いでむつ市川内町の福浦山(2・95 ha)。他はほとんどが1 ha未満の規模とはいえ、死者が1人出ているのだから問題は規模の大小ではない。「原因」を見ると、たいがいは「調査中」となっているが、「火

入れ」(枯草焼却から周辺へ延焼拡大)、「たき火」「たばこ」——と「人為的原因」が目につく。

「十和田市法量夏間沢林野火災【確定報告】」(十和田地域広域事務組合消防本部)の「活動概要」によると——(5月9日)青森県防災ヘリ「しらかみ」が上空偵察の結果、応援必要と判断。岩手県防災ヘリ「ひめかみ」に出動要請し、2機で空中消火作業実施——。

「近くに川があっても……」と担当者が話す。「火の手が山の奥へ広がっていれば、消防車が細く曲がりくねった作業道を深くへは入って行けないし、消防車からのびるホースにも限りがあるから、やはり本格的な消火は空からということになります」

同【確定報告】の《ヘリ》の項目を見ると——防災ヘリ「しらかみ」(1機×4日 4機)、防災ヘリ「ひめかみ」(1機×2日 2機)、防災ヘリ「なま



はげ」(1機×1日 1機)、自衛隊ヘリ「UH」(4機×1日、3機×1日 7機)、自衛隊ヘリ「チヌーク」(1機×1日 1機)——延べ15機。「なまはげ」は秋田県の防災ヘリで、岩手、秋田と連携して消火に当たったのだそうだ。

中でも最も大型は自衛隊ヘリ「チヌーク」で、1回に搭載できる水量は5t。それを十和田湖から汲み上げては13回もくり返し散水したのだという。

散水回数は(「活動概要」)——5月9日に「しらかみ」が16回、「ひめかみ」15回。5月10日は「しらかみ」14回、「ひめかみ」20回、自衛隊ヘリ(UH4機)42回……など11日までに合せて153回も水を汲み上げては散水したのだ。

山火事発生から3日後の5月12日に「鎮圧」。「活動概要」には、『背負い式水囊等を使用し、約100名体制の人海戦術による消火活動。熱画像直

視装置(赤外線)による残火確認』とある。

「完全に火が消えたことを見極めないと、再び発火する危険があるので、気が抜けません。人海戦術と、ヘリコプターから熱画像直視装置(赤外線)を使って残火がないかどうかをしらみつぶしに確認します」と担当者。現場の緊迫感が伝わってくる。

5月14日、「鎮火」。

### 生き残ってほしい

国有林に入るには「入林届」を提出しなければならぬため、夏間沢を管轄する三八森林管理署に届出を出した。案内役として、県上北地域県民局地域農林水産部林業振興課が同行してくれた。

山火事発生から2ヶ月後の7月12日、十和田市の道の駅奥入瀬「奥入瀬ろまんパーク」で待ち合わせをした。山火事の

現場へ案内してくれるのである。

約東は午後1時30分だが、1時前にはもう着いた。昨夜の天気予報では全国的に雨マークが付いていて、十和田も午後から降るかもしれないと念のため早めに青森から向かった。「ろまんパーク」が近づくとつれ前方に黒雲が広がってきた。今にもパラパラと落ちてきそうだった。

駐車場で30分待つよりは予定を繰り上げたほうがいいのか



県民局の4WDに同乗して現場に向かう



ではないかと、携帯から担当者にメールを送った。即、返信が来た。

「私も到着しています」  
1台空けた隣に停まっている車の運転手と目が会い、会釈を交わした。現場までは悪路が続くとのこと、県民局の4WDに同乗させてもらった。

地図で見ると、国道102号と奥入瀬川とが並行して半円を描いているそのつべんに、今は営業していないドライ



立ち並ぶスギの幹が墨のように黒い

ブインがある。その少し手前から、林道へ入った。「林道」ではなく、正確には重機などが走る「作業道」だと教えてくれた。

樹林に囲まれ、道は蛇みたいに曲がりくねっているから、ついでさつき、どっちから入ってきただのか、もう方角が分からないうい。

て赤錆色に染まっている。見上げながら、「1週間前に下見にきたときよりも、枯れた部分が広がってきていますね」

そこは国有林に隣接する民有林で、今後の経過を観察して再生の見込みがなければ所有者が判断して伐採することになるといふ。

赤錆色の部分の上部に、まだ青い葉が残っているのが見える。そこはまだ生きていようだ。

「樹皮が焼けても、その内側のイカンソクケイセイソウが被害を受けていなければ生き残る可能性はあるんですけどね」

漢字で「維管束形成層」と書くらしい。根からの水分と、葉からの養分が通る管から形成されると

車から降りると、目の前に立ち並ぶスギの太い幹が一樣に墨でも吹き付けたみたいになつていた。その上部の葉が、梢に向かっ



墨でも吹き付けたように真っ黒に焼け焦げたスギの幹



ころだそう。人間で言えば血管のようなものだろう。そこが「やられていない」ことを願うばかりだ。

《午後3時50分時点で4万平方メートル(4ha)を焼いた。



……同11時現在、鎮圧、鎮火には至っていない。5月9日午前11時50分ごろに発生した十和田市法量の山火事を報じた東奥日報（5月10日付）の記事にそうある。火はその後3日間燃え続け、焼損面積は27・46haに拡大した。

「そのうちの15〜16haは国有林の伐採跡地で、立木が焼けたのは約10haの民有林です」とのこと。1ha当たりに育つ樹木は約700本だとすると、概算では約7000本が被害を受けたことになるのだ。

## 焼跡にスギを植樹

再び車に乗り込み、てっぺんを目指す。丸太を敷いて補修した下り坂の底を通り抜け、また登っていくと、切り払ったように視界がひらけた。焼けた切り株が転がる斜面の向こうに、ひとかたまりの人家の屋根が見えている。先月、その

集落の方角から焼け跡を遠望してみたのだが、燃え残った立木が黒っぽい櫛の歯のように見えるところが、今、目の前に立っているスギ林のようだ。

取材に先がけ、焼け跡の写真がパソコンに送信されてきた。提供してくれたのは、十和田市にある(有)岩木建設。鎮火から数日後に岩木専務が仕事先へ向かう途中、国道102号を折れた田園沿いの道からスマホのカメラを向けたという。焼け跡のすぐ手前に写っている家にまで火が迫った恐怖感が伝わってくるようだ。

その写真とは逆方向に、今、山のとっぺんから向こうに屋根を見ている。青々と田園が広がる穏やかな農村風景だが、つい2ヶ月前には、山火事の上空をヘリコプターが飛び回る騒然とした光景がテレビで報道されていたのだ。「これが植樹したスギの苗木です」



眼下に農村風景を望む



焼け跡に植えられたスギの苗木たち

担当者が指差した足元に、ひよろりとしたスギの苗木が1本、目に留まった。その先にも、向こうにも、気が付けばそのあたり一面に植えられていた。スギの苗木たちがやがて育ち、再びこのあたりが緑に覆われるまでにはこれからまた何十年も気が遠くなるほどの時間がかかるのである。

「山を守るのは林業。その業務上の範疇を超え、——緑豊かな山並みを、美しい風景として享受している県民の一人

一人も「守ろう」とする意識を持つべきふるさととの共有財産——であると、山火事で失われてあらためてそう気づかされる。家の柱や梁になって人の暮らしを守ってくれるのも「木」の恩恵なのだ。薪になっても最後まで人に尽くしてくれる。

植樹されたスギの苗木が高くたく育つのは次世代になつてから。成木となった姿を見届けられない分、無事に成長するよう祈りを込めた。